

PHOTO ESSAY

西条キャンパスの自然(植物)

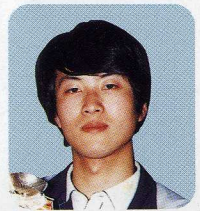
-9-



センブリ

Swertia japonica

理学部研究生 岡本達哉



酷暑の夏もようやく過ぎ去り、今年も西条キャンパスに秋の野草の花が見られるようになった。建物が次々に建設され、年々自動車やバイクが増えているキャンパス内ではあるが、舗装道路を外れて林の中に踏み込むと、まだまだ野草たちは健在である。

センブリはリンドウ科の二年草。日当たりの良い山地や湿地周辺などに生え、花弁や葉を噛むと強い苦味がある。和名の語源も、水で千回振り出してもまだ苦いからだという。東広島市でも各所に分布しているが、キャンパス内にはわずかに自生地が残っている程度である。また西条町には近縁種のイヌセンブリ (*S. dihua* var. *tosensis*) も見られるが、こちらは苦味がなく、葉の形も異なるので区別できる。

センブリは別名、當葉(とうやく)とも呼ばれ、身近な民間薬として古くから日本人に親しまれてきた。薬用植物の利用は中国などから伝わった場合が多いが、センブリの薬効は日本で独自に発見されたといわれている。その利用は室町時代末期頃にまで遡り、当時はノミやシラミに対しての防虫剤であった。文化八(一八一)年刊行の「染物重宝記」にはセンブリによる染色の記述があり、布や紙にセンブリの汁をしみ込ませ、防虫剤としての効果を期待したことが窺える。現代ならさしずめ、タンス用の防虫シートといっ

たところか。人間用としては江戸時代末期から使われ始め、現在も健胃や二日酔いの薬として、また最近では養毛剤にも利用されている。まさに「良薬は口に苦し」を地で行く植物である。医者が不要になるくらい効き目があるといわれて、イシヤダオシ(医者倒し)という俗称もある。

さて、センブリは薬草としての需要が増えるにつれ、天然の物が不足するようになった。しかしそれを補うために栽培を試みても、種子の発芽が悪く、育てにくい植物であった。この原因は近年の研究により、種子の発芽・成長に、土壌菌類の存在が必要なためだといえることが突き止められた。このような現象は、ラン科やツツジ科などにも広く見られ、植物と菌類の間では糖やアミノ酸のやり取りが行われ、共生関係が成り立っている。

このように自然界では複数の生物同士が互いに密接に係わり合っているため、その一部分だけを切り離すことは難しい。最近盛んになった絶滅危惧生物の保護でも、特定の種だけを守るのではなく、その生物を取巻く環境、生態系も保護の対象にするという視点で捉えることが必要であろう。そうした意味で、キャンパスからセンブリの住める場所がこれ以上減らないように願いたい。

(おかもと・たつや)